



北上をやさしく見守る

やすらぎの像

市立公園展勝地の南端に位置する、標高163.3mの丘、男山。この山頂に、やすらぎの像は静かにたたずみ、北上のまちや私たちを見守っています。

像が建てられたのは昭和52年7月。市民の私財で建立され、以来、観光スポットの一つとして何人も人が訪れています。

建立の始まりは、「人々の心のよりどころの場を作るため役立ててほしい」と、一市民の伊藤孝吉さん(当時85歳)が当時の齋藤五郎市長に百万円を託したことによります。齋藤市長は大いに賛同し、やすらぎの像建立の会郡司直衛代表を発足。齋藤市長をはじめ、郡司代表、藤村久喜、及川俊平、柴田善三郎、白井澄、吉田博太郎、司東真雄、藤原八弥、渡辺敏夫、渡辺銀三郎の各氏、11人の市民有志が集まり、準備が進められました。

「戦後、景気が良くなるにつれ、殺しや暴力など世の中が乱れだした。そのような中で人々がホッとできる場所が必要だと、伊藤さんは考えたのでしょ」と、郡司代表。伊藤さんは盛岡中、盛岡一高、東大卒。良質の鋳物を発明し特許を取得したほか、戦後は岩手大学教授を務めた人でした。

伊藤さんの思いに市民も共感。530人もの人から寄付が集まったそうです。「PRしていないのに、こんなに集まった。自分の力だけではどうにもならない時、すがりたい気持ちを持つ人がいるということでしょう」と、92歳になった郡司さんは振り返ります。

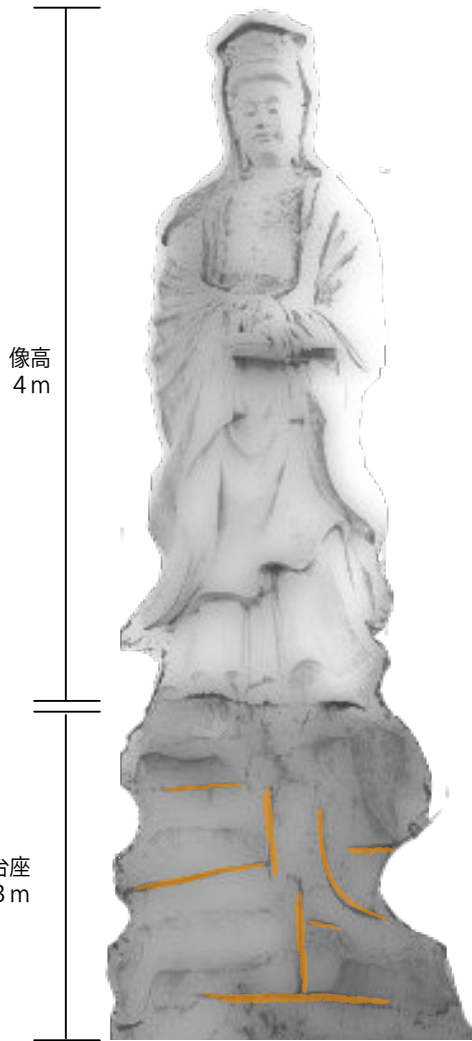
像の制作は、建立の会のメンバーである藤原八弥画伯のデッサンを元に、絵画・彫刻の美術団体「二紀会」会員・木津一夫氏(茨城県古河市)に依頼。大船渡市の小野田セメント

(株)の協力も得て、岩手県産白セメントが使用されました。あわせて男山山頂への道路も整備され、山一体が緑地公園となりました。

郡司さんは計画当初、みんなが楽しむ公園にお金を掛けてまで像を建てることに反対したといいます。やすらぎの像は、一人ひとりの心の中に立てるものだ。「そうは思っても、人間は忙しい暮らしの中で忘れてしまうものだからね。見晴らしの良い場所に建っている像を見れば、心のやすらぎを思い出すことができるでしょう」

像はこれまで建立の会が管理してきましたが、展勝地の活性化に役立ててほしいと、このたび、市に寄贈されました。これからも市民のシンボルとして、平和と豊かな心を与えてくれることでしょう。

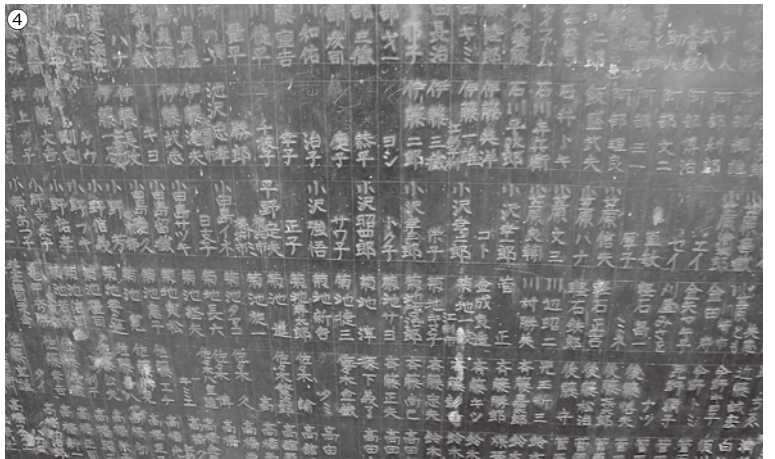
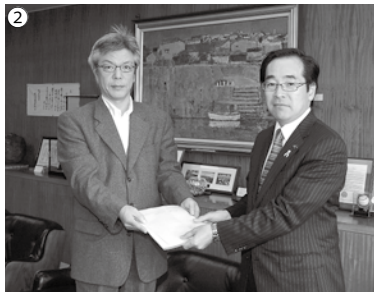
男山山頂からの眺め。北からの北上川と西からの和賀川が合流する地点を足元に、市内を一望できる。また、視界のいい日であれば北は岩手山、南は栗駒山まで見える。頂上近くまで車で登れるので、手軽に北上平野の展望を楽しむことができる。きたかみ景観資産に認定(H22.2.5登録)



台座も木津氏の彫刻によるもので、自然との調和を配慮した、力強い作品。中央に「北上」の文字を読み取ることができる。基礎3尺、台座3尺、像高4尺、重量90ト



①像の仕上げを施す木津氏。現地での施工が不可能であったため、東京御殿場での制作となった②やすらぎの像建立の会・郡司直衛会長に替わり、高橋市長に像一式を寄付する郡司善孝さん(左)③北上川にせり出る男山。道の途中には、展勝地計画で植えられた桜や市民団体が植える白ゆりがある。この時期は秋冬にかけて咲く冬桜も見られる④浄財を寄せた人々の名は、像の台座に刻まれている



問い合わせ
商業観光課 内線 3351